

富岡の万葉集「真金吹く丹生」

群馬県立女子大学 北川 和秀

平成二十九年四月二十五日  
富岡市生涯学習センター

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

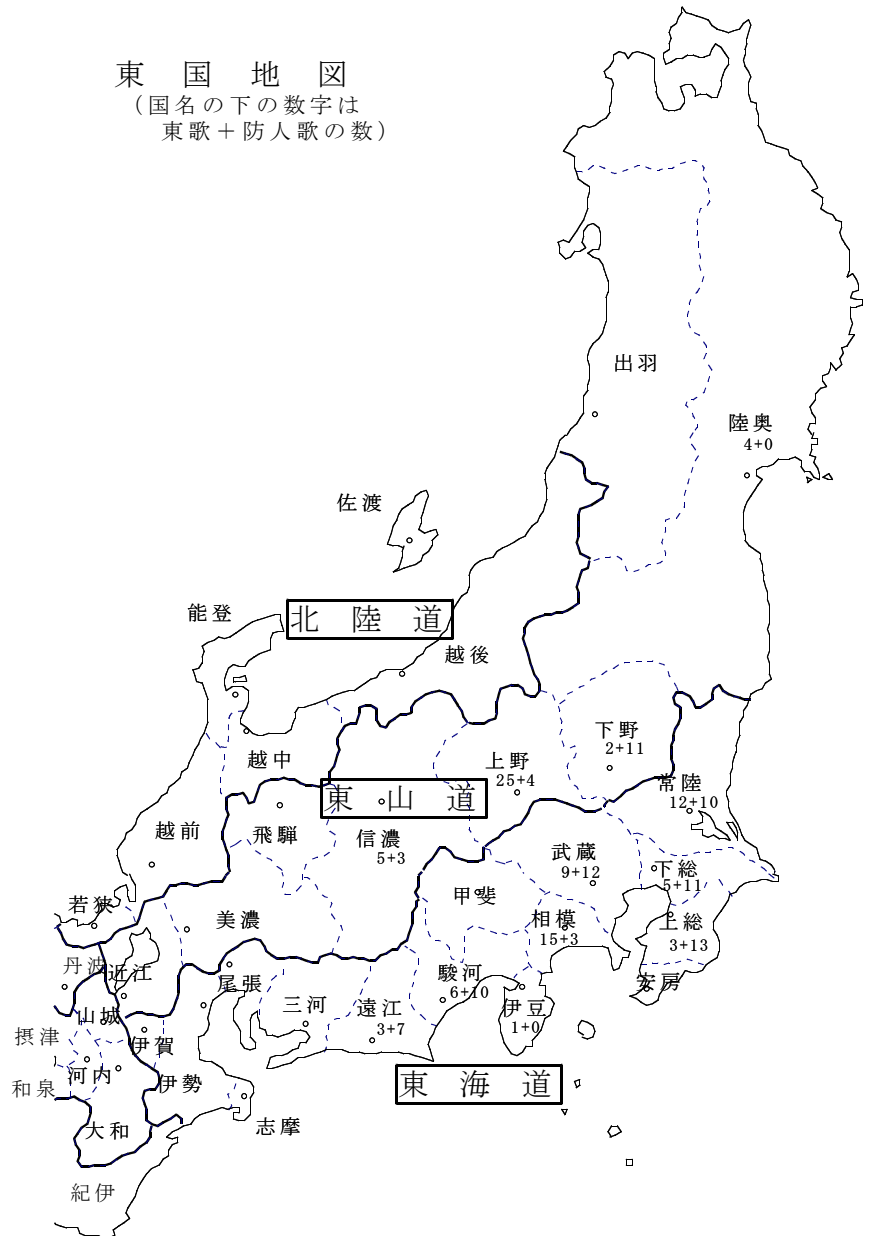
遠江国	7首	18首
相模国	3首	8首
駿河国	10首	20首
上総国	13首	19首
常陸国	10首	17首
下野国	11首	18首
下総国	11首	22首
信濃国	3首	12首
上野国	4首	12首
武蔵国	12首	20首
84首		166首

②昔年防人 … 8首  
合計 92首

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 上野 22首 下野 2首 陸奥 3首	東海道 東山道
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 上野 3首 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	
		合計	230首

東国地図  
(国名の下の数字は東歌+防人歌の数)



【丹生】

真金吹く丹生の真朱の色に出で言はなくのみそ吾が恋ふらくは(一四・三五六〇)  
(丹生の赤土のようには、はっきりと表に出して言わないだけで。私があなたに恋しているということは。)

未勸国東歌

「真金」は鉄。「吹く」は金属を精錬すること。「丹」は赤土、また辰砂(水銀と硫黄の化合物)。「丹生」は辰砂などを含む赤土を産する地の地名。「真金ふく」は「丹生」や「吉備」にかかる枕詞。吉備は鉄の産地である。

「真朱」は、古代に用いられた朱色の顔料。赤土。辰砂。上二句は「色に出」を導くための序詞。

「言はなく」「恋ふらく」の「く」は「ク語法」と呼ばれ、動詞・形容詞・助動詞などを名詞化する用法。「くすること」という意味になる。上代には盛んに用いられたが、平安時代になると使われなくなり、今日では、「曰く」「恐らく」「老いらく(の恋)」などに化石的に残るのみとなった。「言はなく」は「言はず」のク語法で、「言わないこと」。「恋ふらく」は「恋ふ」のク語法で、「恋していること」。

◎古代における地名「丹生」

国名	木簡・和名抄	延喜式神名帳
大和		(宇智郡) 丹生川神社 (吉野郡) 丹生川上神社 (宇陀郡) 丹生神社
伊勢	飯高郡丹生郷	(飯高郡) 丹生神社 (飯高郡) 丹生中神社
近江	坂田郡下丹生里	(伊香郡) 丹生神社
上野	甘楽郡丹生郷	
若狭	小丹生郡 遠敷郡丹生郷	(遠敷郡) 丹生神社 (三方郡) 丹生神社
越前	丹生郡 丹生郷	(敦賀郡) 丹生神社
越後		(古志郡) 小丹生神社
但馬		(美含郡) 丹生神社
紀伊		(伊都郡) 丹生都比女神社
土左	安藝郡丹生郷	
豊後	海部郡丹生郷	

このように多数の「丹生」地名が古代に存在したことが知られるが、これらの中で東歌の地域に所在するのは上野国甘楽郡丹生郷（現在の富岡市北西部）のみである。この歌は国名不明の部に収められてはいるが、上野国の歌である可能性が高いと考えられる。

万葉集卷十一に次のようなよく似た歌がある。

・白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（二七二五）

「白真砂」は「白い砂」で、「御津」に掛かる枕詞。「御津」は大坂湾にあった港で、「大伴の御津」「難波の御津」などとも呼ばれた。「埴」は黄赤色の粘土で埴輪などの材料。「埴生」は埴のある場所。

真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇）  
白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（二七二五）

「丹生の真朱の」の歌と比べると、一句目と二句目とが異なるだけで、三句目以下は全く同じである。一句目・二句目も、「枕詞＋地名＋（黄）赤の土」という全く同じ構造をしている。偶然の一致とは思えないので、丹生の真朱の歌は、御津の埴生の歌（あるいはさらに別の類歌）を改作したものと考えられる。丹生の真朱の歌には東国方言は含まれていないので、この改作は東国に下ってきた都人の手によるものかもしれない。

《参考》上野国東歌関係の類歌あれこれ

a 上毛野伊奈良の沼の大藪草外に見しよは今こそ勝れ（三四一七）  
b 淡海の海沈着く白玉知らずして恋せしよりは今こそ勝れ（二四四五）

c 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）  
d 韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし（三六七〇）

e 入間路の大家が原のいはるつら引かばぬる吾にな絶えそね（三三七八）  
f 上毛野可保夜が沼のいはるつら引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）

g 上毛野平度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五）  
h 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（三四〇五或本）

【安蘇】

上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（三四〇四）

上野国東歌

（上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それでもなお満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのだろう。）

（別解 上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえて寝ても、満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのだろう。）

上毛野阿蘇山葛野を広み延びにしものをあぜか絶えせむ（三四三四）上野国東歌  
（上野国の阿蘇山の蔓草は、野が広いのを幸いに遠くまで這い延びてゆく。こんなに這い延びたものがどうして途中で絶えたりしようか。↓二人の仲もずっと続いたきたのだから、どうしてそれが途中で絶えたりしようか。）

○「安蘇の真麻群」の歌

「真麻」の「ま」は美称の接頭語。「そ」は麻で、複合語の中にだけ現れ、単独で

は用いられない。「上毛野安蘇の真麻群」までは「かき抱き」を導くための序。麻は細長く伸びて三メートル以上にも達するため、倒れないように密植する。その密生した麻を収穫する時、抱きかかえて根こそぎ引き抜くことから、「かき抱き」を導くとされる。「かき抱き」を言うための序詞として麻の束をもってきたところは生活と密着している。序と取らなければ別解のような解釈になる。

麻は東歌で最も多数うたわれている植物である。近代まで広く栽培されていたが、化学繊維の普及に伴い、衰退した。今日、群馬県内では、「岩島麻」の産地である東吾妻町岩島地区の三島が唯一の栽培地として残るのみとなった。東歌では、麻の他に、柳、稲、菅、おけら、松など、生活に身近な植物が多くよまれている。一方、万葉集全体で多くよまれている植物は、萩、梅、橘、菅、松、葦、茅、柳、藤、桜などであり、東歌の様相はそれとはだいぶ相違している。

「あど」は「何」と同じ。万葉集では東歌にのみ七例見える。

#### ○「阿蘇山葛」の歌

「つづら」はつる草。つる草は地を這いつつ延びてゆく。「あぜ」は「何故」と同じ。万葉集では東歌にのみ八例見える。「絶えせ」はサ変動詞「絶えず」（「絶ゆ」の名詞形「絶え」にサ変動詞「す」が複合したもの）の未然形。「どうして絶えようか、絶えはしない」。

この歌は譬喩歌の部に収められている。表面的にはつる草のことしかうたっていないが、つる草はあくまでも比喩であって、歌の趣旨は、二人の仲が絶えないようにということであり、男女いずれの歌とも解しうる。内容も、誓約とも、決意とも、願望ともとれる。

#### ◎古注釈における「安蘇」についての記述

①下野ニハ安蘇郡アレド、上野ニハ何レノ郡ニ安蘇ト云所ノ有ニカ。和名集ニハ見エス。  
（契沖『万葉代匠記』精撰本）1690

②下野にある郡の名也。古は上野に属せしか。又上野にも郷の内にある歟。何れにまれあそは地名也。同じ地名なれ共まそと云ふ言を求めん為のあそ也。又あそと云ふ詞はあさと云詞なれば、是等の意をこめて読めるなるべし。  
（荷田春満『万葉集童蒙抄』）1733頃

③下野国、安蘇郡、あそ山、あその川原、あそ村などよめり。上野国には、きこえず、誤しもの也。……（頭注 上毛下毛元来一国なれば混してよみしなるべし）  
（高井宣風『万葉集残考』）1816

④（頭注 下野安蘇郡、もとはこの上野にもわたれる地には非るか。）  
（鹿持雅澄『万葉集古義』）1842

⑤安蘇は今甘楽郡に宇田村と云在、其村に小山あり、今峰山と云【稻荷を祭て今寺有】其山を往古より安蘇岡山と云ひ来れるを、今朝岡と書くと鈴木千本云り、然らば宇田の宇も芋の移りたるにて、今も甘楽郡は、芋を多く作り、上野麻とて、いと名高く殊に此宇田の辺り多しといへば安蘇は此辺りと定むべし【但し下に安蘇山つづらとよめる安蘇は箕輪のほとりをいふといへば別か】  
（橋本直香『上野歌解』）1855頃

⑥安蘇山は里人云、今の相馬嶽の事にて【安曾と相馬と音ちかし】其辺りより箕輪のわたりをかけて安蘇の荘と云ふとぞ、……箕輪軍記に北は安曾山相馬の麓と有るは其名の二つに成しにてすべて此ほとりを安曾と云しと見えたり、  
（橋本直香『上野歌解』）1855頃

#### 《参考》

下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ（三四二五）下野国東歌

（下毛野の安蘇の河原を、石を踏まずに宙を飛ぶような気持ちでやってきた。だからあなたも本当の気持ちを言っしてほしい。）

上野国の安蘇も下野国の安蘇と関連づける考え方が多い。かつて安蘇の地は上野・下野両国にまたがるような広大な地域であったか、あるいは、上野・下野の国境線が移動することがあり、それに伴って安蘇の地が上野国に所属していた時期と下野国に所属していた時期とがあったと考えるのである。

現在、富岡市の貫前神社の北方、直線距離にして五〇〇メートルあまりのところに阿曾岡公園があり、そこに昭和十一年（一九三六）に建てられた「安蘇の真麻群」の万葉歌碑がある。

さて、「上毛野安蘇」はいずれの地であろうか。桐生市の方は、下野国安蘇郡が古代から存在した郡名であることは確かだが、安蘇と呼ばれる地域が上野国の方にも広がっていたとか、安蘇の地の所属が上野・下野両国間で変動していたとかいうことは推測に過ぎず、確証はない。一方、富岡市の方は、安蘇岡山（『上野歌解』の表記）という地名がいつ頃まで遡れるものか手掛かりがない。

ただ、地名「あそ」は「あさ」に由来する可能性がある。「安蘇の真麻群」と言ったとき、「麻の産地である）安蘇の、その麻の束」という意味の連関が推測される。『万葉集童蒙抄』に、「あそは地名也。同じ地名なれ共、まそと云ふ言を求めん為のあそ也。又あそと云ふ詞はあさと云詞なれば、是等の意をこめて読めるなるべし。」とあるのは首肯できる。

## 【多胡】

吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（三四〇三）  
（私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことだ。）

多胡の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに（三四一一）

（多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張つて言い寄つてみたけれど、ああ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。（ちつとも靡かないでさ。）いくら顔が美しいからって。）

## ○「多胡の入野」の歌

「まさか」の「ま」は目、「さ」は方向、「か」は所の意で、「まさか」は、「まさここに」「さしあたつての今」「現在」。万葉集に「さ百合花後も逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ（さ百合花の名のように後（ゆり）にもまた逢おうと思ふからこそ、今の今もあなたと親しくお付き合ひしている）」（巻一八・四〇八八。大伴家持）という例があり、この例では「後」と「今のまさか」とが対比されている。「入野」は山地に奥深く入り込んだ野。「いり」は「入江」や「入り海」の「いり」に同じ。地形図を見ると、高崎市吉井町多比良、神保、塩あたりに南方の山地に向かつて低地が細長く延びているような場所がいくつかある。そういう地を「入野」と呼んだのであろうか。

かつて多胡の地に入野村があつた。この村は昭和三〇年の町村合併で吉井町の一部となり、村名は消滅したが、今も入野中学校、入野小学校などに「入野」という名を留めている。しかし、この地名は、明治二二年に小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して新しい村ができたときに、万葉集東歌の「多胡の入野」が黒熊のあたりに比定されるといふ説を採用して新村名としたものである。この村名を根拠に東歌の「入野」を地名と考えては話が逆になる。

「多胡の入野の」は「おく」を導くための序。「おく」という語には、空間的な「奥」という意味と、時間的な「将来」という意味とがあり、この歌ではそれを懸けている。「かなし」は、どうしようもないほどの痛切な感情を表す語。

①「とても悲しい」「つらく切ない」という意味と、

②「切ないほどにいとしい」「かわいくてたまらない」という意味とがある。

神さぶる磐根こごしきみ吉野の水分山を見ればかなしも（巻七・一一三〇）

（神々しい岩がごつごつした吉野の水分山を見ると、何とも言えないほどの強い感動を覚える）

という例は、①の「悲しい」「つらい」でもなく、②の「いとしい」「かわい」でもない。まさに「どうしようもないほどの痛切な感情」の意味で用いられている。

万葉集に「かなし」はちょうど一〇〇例ある。そのうち、今示したような①でも②

でもない例は三例ある。「多胡の入野」の歌に二例用いられている「かなし」もひとまず除外すると、残りは九五例。それらを、東国の歌（東歌・防人歌）とその他の歌（あらかたは畿内の人々の作と考えられる）とに分けて、その用法を示せば次の通りである。

a 東国の歌……①の意味 三例（八%）、②の意味三五例（九二%）

b その他の歌……①の意味五二例（九一%）、②の意味 五例（九%）

東国の歌とその他の歌との間にはこれだけ顕著な違いがある。「かなし」の意味用法には地域差が厳然として存在する。

なお、東国の歌の中で①「悲しい」「つらい」の意味で用いられている三首はいずれも防人歌である。東歌に限定すれば、東歌では「かなし」を①「悲しい」「つらい」の意で用いた例は見当たらない。「多胡の入野」の歌は極めて例外的な存在である。

そこで、この歌の初句の「恋」を「恋人」の意味にとつて、「私の恋人は今も愛しい。そしてこの先もずっと愛しいことだろう」と解する説がある。こう考えれば、この歌の「かなし」の意味は東歌の例に叶うが、万葉集には「恋」という語を「恋人」の意に用いた例はない。ひよつとしたら、この歌の作者は東国人ではなく、都から下ってきた官人かもしれない。そういう目で見ると、この歌には東国方言とおぼしき語は含まれていないし、歌も非常に技巧的である。可能性は高いのではあるまいか。

「草枕」は、通常は「旅」に掛かる枕詞。万葉集に四九例あるうち、四八例が「旅」に掛かつており、残る一例が「多胡」に掛かるこの歌の例である。なぜ「多胡」に掛かるのか分からない。当時、「草枕」とくれば誰もが「旅」を連想したのであろうから、あるいは、この歌の作者は、この枕詞を用いることで、自分がこれから旅に出ることを暗示しようとしたのかもしれない。

## ○「多胡の嶺に」の歌

「多胡の嶺」は多胡郡にある山。具体的にどの山を指すか明らかではないが、牛伏山の可能性が高いか。綱で土地を引き寄せるといふ話は『出雲国風土記』の国引き神話を連想させる。上代では普通の発想であつたのだろうか。

「あにくやしづし」は未詳。今は仮に「あ、憎や沈石」の意に解した。「沈石」は水底に沈んでいる石。他に「あに來や静し」（どうして寄つてこようか、平然として）とする説もある。ただ、「静し」という形容詞はない。

## 《参考》

弁官符上野国片岡郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊（多胡碑）